



ペテロとヨハネは道を急ぎます。慕い続けた主イエスの墓のあるところへと、その表情にあるのは真剣な想い、若いヨハネは手を胸の前に合わせ祈るよう、その視線は遠くへ向かいます。ペテロの表情は張りつめています。その目は何かを必死にとらえようとしているようでいて、しかし目の前の何ものにも焦点を結んでいないようです。この時ペテロの胸中を過るのはいかなる想いでしょうか。口を極めて三度も主を知らないと言いつつペテロ。そのまま十字架上で主イエスは亡くなられました。主を裏切ってしまった。その苦く、痛みを伴う記憶が今、どうしようもない力として彼を突き動かし、主の墓へと急がしています。

これはEugene Burnandによる絵画、「復活の朝に墓へと走る弟子ペテロとヨハネ」。ヨハネによる福音書20章から描かれる十字架で主を失った弟子たちの姿です。二人が懸命に先を急ぐその理由は、主が墓には見当たらないという心を掻き回される知らせゆえでした。理解しようのない知らせ。何を求めているのかもわからず、途方に暮れたまま走り出した二人でした。墓に到着。その場で与えられたのは答えではなく、さらなる不思議でした。主はそこにはおられなかった。あるのは空の墓。何のために自分たちは走ってきたのか。混乱のただ中にいるこの彼らの姿に、必死に主の場所へと近づこうとしたその姿に、私たちは思わず己の姿を重ねて見るのではないのでしょうか。いったい

安かれ

ヨハネによる福音書 第20章19-23節

相良 昌彦

高等部宗教主任

この私に何が告げられようとしているのか、私たちのいかなる知恵も、経験も養いも、空の墓の不思議への私たちの理解の助けにはなりません。しかし、この私たちには、確かに主ご自身が、自ら現れ、語りかけ、答えをくださるのです。

イースターの朝が明けた後、混乱と恐れに靡に鍵をかけて閉じこもっていた弟子たちのただ中に主は来てくださいました。「あなたがたに平和があるように」。口語訳の聖書では「安かれ」です。幸いな響きではないでしょうか。私はここにいる。あなたがたと共にいる。主のこの御言葉は、現代に生きる私たちに今向けられています。思うのです。このイースターに満ち満ちる主の救いの御業の不思議さにこそ力与えられる者でありたいと、私たちが心の扉を閉ざしていても、私たちがそれぞれいるところへと主は近く来られ、声をかけてくださるのですから。私たちは決して一人ではないのです。

クリスマスの夜を思い起こします。主なる神の御心を誰もが知らなかったあの夜、幼子はお生まれになりました。人となられた神の子が十字架につくために。私たちが代価を支払われ生かされるために。この御業を実現される主なる神の慈しみが、私たちの命です。私たちは、神の目に一人一人かけがえのない存在であり尊いのです。主のこのような恵みに触れるとき、私たちにとって主イエスの御姿が新たにになります。主がどのように一人一人に御言葉を語られたのか。どのように人々を見つめ、人々の肩に、その背に御手を置かれ癒されたのかが、私たちも今、主によって癒され、慰めを得、新たに自分の足で、それぞれ道を歩む者とされるのです。ハッピー、イースター。主よ、ありがとうございます。あなたがわたしを取り戻し、生かしてくださいます。

グラッド・ポスク!

(スウェーデン語で「復活祭、おめでとう!」)

野村 祐之

大学・女子短期大学 非常勤講師

スウェーデン、ダーラナ地方の教会で迎えたイースターの想い出です。ルター派の国、スウェーデンの復活祭(ポスク)は国民的休日で、春分過ぎ、受難週の木曜から翌月曜日まで五日間に渡ります。木曜日の夕拝は「最後の晚餐」を記念するミサ。弟子の足を洗ったキリストに倣い、牧師さんが礼拝の中で足を洗ってくれます。

翌日は受難の金曜日。キリストが亡くなった午後3時、チャペルの十字架が床に降ろされ、それを囲んでの黙想と祈りの時が守られます。これは夜を徹して続けられ、翌土曜日の夜中近くまで及びます。

この間、断食する人もいますが、食堂にはパンとチーズ、りんごと水が準備されていて自由に食べることができます。テーブルの花瓶には黄色い羽を飾った白樺の枝がさしてあります。(写真)キッチンを覗くと高校生たちがゆで卵をカラフルに染めていました。女の子に「春が来るの見たい!」と聞かれ、つなずくと白樺の枝先をキャンドルにかざします。プチッと弾けて薄緑の芽が開くと「ほら小ちゃな春!と顔をほころばせました。

キッチンのドアが開き、お婆ちゃん姿の赤いほっぺの女の子が現れました。小春ちゃんがキャンディを手渡しながら、こう教えてくれました。「魔法たちよ、今日はキリストが陰府に下った日。これ幸いと小さな魔女が出歩くの。」

聖土曜日の夜がふける頃、大礼拝堂には続々と街の人々が集まって来ました。中世の石造りの教会堂はキャンドルを手にする人で満席です。お喋りする人は誰もいません。明かりが消され、聖堂は暗黒の

しじまに包まれました。

真夜中0時。鳴り渡る鐘が新しい日の到来を告げます。聖堂の暗闇に一条の光が輝きました。「主は～よみがえられた～」との声と共に、輝く火の柱のようにキャンドルが祭壇へ進みます。「世の光、キリストは～よみがえられた～!。」

祭壇から会衆へと灯が広がる中、天井に目をやると大きなキリストが手を伸べて見守る姿が揺らめく光に浮かびます。

トランペットが鳴り響き「ハレルヤ」の歌と共に牧師さんが出口へ向かうと人々が数珠つながらに続きます。その行列は聖堂を出て隣の墓地へと向かいます。

満月後すぐの月明かりに照らされて白い衣服の牧師さんがチョウのように舞い、キリストが初穂として復活された喜びの知らせを、永眠する人たちに告げて廻ります。

ポスクは主の復活の記念日。教会が毎週日曜日の朝、「主日礼拝」を守るその原点が復活祭にあったのです。

グラッド・ポスク! 復活祭、おめでとう!

撮影:野村祐希



ハレルヤ。わたしたちの神をほめ歌うのはいかに喜ばしく神への賛美はいかに美しく快いことか。



賛美の喜びをともに

詩編102編19節にもあるように、私たちは、神さまを賛美するために創造されました。祈りを合わせて賛美するとき、歌うことによってしか生まれない神さまとの霊的交わりが生まれます。そして、一人より二人、二人より十人、十人よりみんなで声と息をあわせて歌うとき、神さまがくださった「音(倍音)」はより豊かに響き、賛美のよるこびは、ずっとずっと大きくなり、神さまとの霊的交わりは、より確かなものになります。賛美すること、私たちがの礼拝、信仰生活にとってかけがえのない神さまからのプレゼントなのです。

特別な場合だけでなく、生活や信仰のいろいろな場で、みんなで息を合わせて歌い、その喜びを分かちあうこと大切さを、私は、音大の学生だったとき、また教員時代を通して実感してきました。「歌うことの上手・下手、自信のあるなし」が問題なのではありません。神さまはいつも、私たちの賛美のすべてを見守り、受け入れてくださっています。体をラクにして、はずかしがらずに、口をしっかりと開け、深くいっぱい呼吸をし、同じ気持ちを持った仲間と息を合わせて、心を込めて神さまに向かって賛美のうたを歌うとき、言葉では説明でき

147:1 Psalm

詩編 147編 1節

高浪 晋一

日本賛美歌学会会長、日本基督教団讃美歌委員、元国立音楽大学教授

ない喜びが私たちの中に生まれるのです。

このことを多くの人にお伝えし共有できればと、ライフワークのひとつとして、各地の学校や教会、地区の講習会にお招きいただき、「賛美のどき 歌唱指導」をご一緒にさせていただく活動をしています。私が、私自身がこの活動から、多くのことを学び、活力をいただいております。青山学院に、2011年10月の「讃美歌21講習会」昨年2012年5月チャペルウィークの講師としてお招きいただいた際にも、多くの学生さんたちが、力強く心を込めて賛美されている様子に深い感銘を受け、大きな力をいただきました。その賛美の歌声は確実に神さまのもとへ届いていたと確信しています。

私が音楽と出会い、これまでに積み重ねてきたことは、この活動に結びついていたように思います。すべては神さまのご計画であったのだと思わずにはいられません。少しでも多くの方々と賛美の喜びを分かちあう時間が与えられ、共に声高に神さまを誉め歌うことができるよう、自分自身もさらに学びを深めつつ、これからもこの活動を続けていきたいと思っています。

さあ、みなさんも、臆することなく、心を込めて、声を合わせて、神さまに向かって賛美のうたを共に歌いましょう!

日本バプテスト連盟 川崎バプテスト教会

榎本 美枝

本部 宗教センター事務局

私の所属する川崎バプテスト教会は、長靴のような細長い地形をした川崎市内を縦断する、JR南武線の武蔵新城駅から徒歩2分、東京と横浜のビッグタウンに挟まれた川崎市のほぼ中央にあります。

川崎バプテスト教会は2012年に創立50周年を迎えました。記念すべき第1回主日礼拝は、1958年新城浴場会館にて5人で行われました。1962年大井バプテスト教会川崎伝道所から、川崎バプテスト教会が誕生しました。開拓伝道からわずか4年で教会組織ができたことは、当時の教会員が伝道意欲に燃え、一丸となって「全日本にキリストの光を」という日本バプテスト連盟のビジョンを掲げていたことを物語っています。

1965年には「ひかり園」という幼稚園が併設され、1984年までの19年

間、地域の子ども達を通してキリストの香りを放ち続け、多くの園児、卒園児が日曜日の教会学校へ通っていました。平日は幼稚園、日曜日は園舎を教会学校の教室として利用し、園庭は教会員の駐車場となりフル活動していました。

その後、主の恵みのもと新会堂が与えられ、1992年新会堂献堂式を執り行い現在に至っています。バプテスト教会は、バプテストという洗礼(バプテスマ)を受けるための浴槽が壇上に備わっているのが特徴の一つです。私たちの教会もバプテストが壇上に備わっているのが特徴の一つです。私たちの教会もバプテストが壇上に備わっているのが特徴の一つです。私たちの教会もバプテストが壇上に備わっているのが特徴の一つです。

現在の伊藤光雄先生は5代目にあたり、いつも笑顔で明るく話しかけてくださり、教会出席者へ元氣と勇氣をくださる牧師です。初代牧師の伊藤隆夫先生の御子息であり、このことは我々教会員にとって、大変感慨深い信仰の継承、そして素

晴らしい神の御計画と思わずにはいられません。主日礼拝の前には10時から全年齢層の教会学校が年齢ごとに行われて行われます。どのクラスも同じ聖書箇所を学ぶため、幼稚科と小学科にそれぞれ出席している我が子と、「今日の聖書のお話はどうだった?」などと会話をするのも楽しみの一つです。主日礼拝は11時から18時半からの2回行われ、多くの方々が礼拝に出席できるよう配慮しています。また、子どもから高齢者の方々すべての人が教会に集うことができ、礼拝中ナースルームで就学前の子どもを預かったり、教会の車で高齢者を送迎したり、礼拝堂内で手話通訳をしたりしています。礼拝で心が満たされた後は壮年会や女性会の奉仕による昼食の用意があり、カレーライスやおうどんを食べて、和やかな雰囲気の中でお慶も満たされます。

このように私たちの教会は、教会員一人ひとりが神から頂いた賜物を生かし、神の家族としてお互いを支え合っています。晴らしい神の御計画と思わずにはいられません。主日礼拝の前には10時から全年齢層の教会学校が年齢ごとに行われて行われます。どのクラスも同じ聖書箇所を学ぶため、幼稚科と小学科にそれぞれ出席している我が子と、「今日の聖書のお話はどうだった?」などと会話をするのも楽しみの一つです。主日礼拝は11時から18時半からの2回行われ、多くの方々が礼拝に出席できるよう配慮しています。また、子どもから高齢者の方々すべての人が教会に集うことができ、礼拝中ナースルームで就学前の子どもを預かったり、教会の車で高齢者を送迎したり、礼拝堂内で手話通訳をしたりしています。礼拝で心が満たされた後は壮年会や女性会の奉仕による昼食の用意があり、カレーライスやおうどんを食べて、和やかな雰囲気の中でお慶も満たされます。



JR南武線武蔵新城駅より徒歩2分
〒211-0044 川崎市中原区新城5-8-27
電話: 044-777-1795 Fax: 044-799-7517
ホームページ: http://homepage3.nifty.com/kawasakibc/framepage1.html
E-mail: kawasakibc@mh.point.ne.jp



WESLEY HALL NEWS



話し合い、論じ合っている。イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。

ルカ 24 15

『みんなの聖書 絵本シリーズ』

(36巻セット)

文:日本聖書協会 絵:藤本四郎(旧約) 杉田幸子(新約)
日本聖書協会 2008年4月・2011年3月

田中 和美

初等部教諭

「むかし、むかし、そのむかし。今から2千年も前のことでした。ナザレの町に、イエスという人がいました。イエスさまは、ある日...」これは、私が子どもの頃、通っていた小学校の「聖書」を覚えてくださった「チャプレン」が、授業の始めにおっしゃっていたフレーズです。この言葉の後は、イエス様の御業やたとえ話が続きまして、特別なリズムで唱えられた冒頭の言葉を聞いた後、聖書の世界にどっぷりとまはって...そんな授業が展開されました。

今年度、私が学級担任をしている3年生の子ども達も同じようです。宗教主任の小澤先生が展開する「宗教学」の授業を楽しみにしています。毎日の礼拝で小澤先生の祈りに耳を傾け、先生からの説教を伺っていても、子ども達は礼拝とは違う魅力を感じて、きらきらした目で先生がなされる聖書の話を聞いています。関心の高さが垣間見える瞬間です。

キリスト教が身近にある環境で育てば、聖書が身近にあることは



必然です。でも、私は子どもの頃、聖書は特別な読み物だと感じていました。何よけの厚み、そして、児童文学とは異なる独特の言い回しによってそう感じていたのかもしれない。「礼拝で読む聖書は、特別なもの。授業で聞く聖書は、身近なもの。」子どもの中にそんな棲み分けがあるとしたら、子どもと聖書を繋ぐためには、大人以上「仲立ち」が必要なのです。

日本聖書協会が出版している『みんなの聖書絵本シリーズ』は、良い「仲立ち」の一つになると思います。やさしく分かりやすい言葉で、聖書のこと書かれた絵本です。全36巻のこのシリーズは、旧約聖書と新約聖書が交互に紹介されています。また、少し大きくなったら、もしくは読み聞かせをする大人に役立つように、巻末に解説ページや新共同訳聖書の箇所参照ページがついています。

キリスト教が身近にある環境で育てば、聖書が身近にあることは

たところ、喜んで手にとってくれました。そして、読後の感想の多くに「おどろいた」「すごい」という言葉、そして沢山の「発見」が出てきました。対象はお話によって異なりますが、どれも御業の御計画やイエス様の御業であることに、子ども達は少しずつ気づいているようです。子ども達に特に人気があったのは、イエス様の奇跡が描かれた「カナのけっこんしき～お母さんのしんぱい」(4巻)、「五つのパンと二ひきの魚」(16巻)、旧約聖書のヨナ書を描いた「魚にのみこまれたヨナ」(17巻) エステル記を描いた「エステル～勇気あるおきさきさま」(23巻)でした。これらの絵本を読んでから、改めて聖書を読み直した子もいます。

子ども達と聖書を繋ぐ良い「仲立ち」の手立てとして、このシリーズを大切に紹介していこうと思っています。

編集後記

今年のイースターは3月31日です。旧1年度イースターで送り、新しい年度の最初の週をイースターで迎える。復活の主は常に共にいてくださいます。変化が求められる時代、後退や放棄の思いに駆られる時、「変えることのできるものと、変えられないもの」と、そのどちらかに預けながら歩んでゆきましょう。

Wesley Hall News 第11号
2013年3月1日発行
発行 青山学院宗教センター 学院宗教部長 橋田 順好
東京都渋谷区渋谷4-4-25
TEL.03-3409-6537(ダイヤルイン)
URL http://www.aoyamagaakuin.jp/center/index.html
E-mail agcac@aoyamagaakuin.jp
編集 ワズレーホールニュース編集委員会
印刷 株式会社 万全社



表紙写真
高等部PS講堂での礼拝

